

## 学生相談で浮かび上がってきた男子学生にみる幼少期の母子関係

人間科学部、学医（精神科医） 小林 隆 児

本学での勤務もまる二年が経過し、本学の風土、校風というものがなんとなくわかるようになってきた。市民の評判通りおしゃれで育ちの良さを感じさせる学生が多い。講義をしても（少なくとも私の講義では）私語はほとんどなく、こちらの指示には気持ち悪いほどよく従い、宿題もきちんとこなす。しかし、講義の終わりに「質問はありませんか？」と尋ねてもほとんど反応らしきものはない。とにかく大人しい。私は講義で熱く語ることも少なくないが、肌で感じられるような反応が返ってくることはほとんどないのである。もちろん私の講義のせいもあるだろうが、どうもそれだけではないなど学生相談をしていて実感するようになった。それは何かと言えば、表立って大騒ぎするような反応は見せないが、自分のことを語るができない学生の多さである。悩みが何なのか、なぜこんなに悩むようになったのか、自分のこころの軌跡を辿ることなどまったくといっていいほどできないのだ。学生に話を聞いていくうちに次第に浮かび上がってきたのが、これまで両親（時に父親、時に母親）の期待に応えようと努めてやってきたが、いざこれから自分で何をどうしたらよいのか、皆目見当がつかないといった実に頼りない状態にある学生の多さである。

これはなんだろうかと思いつつ相談に乗っているのだが、ある男子学生の話を知っているうちに、私が本業のひとつとしてきた乳幼児期の母子臨床である光景が生々しく蘇ってきたのである。

ある事情からその学生は、アルバイトをして学資を自分で稼ぐようにと母親から言われ、途方に暮れていたが、これまで（特に）母親の期待に応えようとして頑張ってきたという。そこで私が「日頃お母さんにどんなことを言われることが多いの？」と尋ねた時である。彼は「もう少し頑張ればあなたもいいんだけどね。やればできるんだけどね」と言われるというのである。私はこれを聞いてすぐに次のように返した。「自分では真面目に頑張っているつもりなのに、そう言われたらどうしてよいかわからなくなるよね」と。すると、彼は大粒の涙を流し始めたのである。

この時私の脳裏に浮かんでいたのは、2歳9ヶ月の男児と母親の遊びに付き合っていたときの場面であった。その男児は母親の前で大人しく萎縮するようにして遊んでいたが、母親の言われるままに動いていた。ある遊びをしていると、何を思ったのか母親が（子どもからみれば）唐突に目の前にあった滑り台に誘った。子どもは言われるままに滑った。するとつぎに母親は敷かれたマットを見て「ごろんは？」と前転をするように指示した。子どもはぎこちない身のこなしでなんとか前転すると、母親は「ちょっと駄目ね」とこともなげに言ったのである。

私がなぜこのエピソードを想起したかといえば、先の学生親子のやりとりとあまりにも重なり合ったからである。子どもは母親の期待に応えることで自分の存在を認めてもらおうと努めていたにもかかわらず、母親から駄目だしされたのである。子どもはどのようにしてよいやら分からなくなり、大混乱に陥ってしまうのではないかと危惧されたからである。案の定、この子は幼稚園に入ると、突然他児に噛み付くなどの粗暴行為で大問題となった。

親の期待に応えることでなんとか自分の存在を認めてもらおうと努力するということは、それまでに自分の存在を無条件に認めてもらった体験がなかったことを暗に示している。大学に入り、これから自分で人生の道を切り開かねばならない時期になってどうしてよいやら困惑を体験するのはある意味当然と言わなければならない。

本学の学生の品の良さや従順さの裏にそんな心の危うさが潜んでいることを、われわれ大学人は肝に銘じて日々の教育に取り組む必要がある。学生の漠とした悩みの起源はそれほど深いものなのだと思う。